

岐阜農林事務所の普及活動状況

令和元年 5 月 2 5 日現在

今月の重点活動

■スマート農業 無人トラクターいよいよ始動！

県では、本年度から 2 年間、国のスマート農業技術の開発・実証プロジェクトを活用して、（農）巣南営農組合、JA、農機メーカー等とコンソーシアムを設立し、超低コスト輸出用米の生産実証に取り組む。農業普及課は、プロジェクトの進行管理や実証試験のデータ分析等の役割を担っている。

5月31日には、農研機構中央農業研究センター プロジェクトオフィサーを招いて、新たに導入されたほ場管理システムの入力状況や今後の作業計画等を確認する予定である。

また、間もなく作業が始まる無人トラクターについては、どのほ場でどのように動かすのか細かく検討が必要であり、農業普及課では、（農）巣南営農組合や農機メーカーらと検討を重ねるとともに、実証内容が検証できるようデータ収集を進めていく。

（地域支援第三係・松本政行）



【導入した無人トラクター】

多様な担い手づくり

■いちご 新規就農者、ベテラン生産者から学ぶ

5月13日、20日、農業普及課の呼びかけで、新規就農 1 年目の生産者が本巣市の生産者の収穫や調製作業等を見学した。

普段は、他の生産者の収穫や調製作業を見る機会はほとんどなく、また自分自身の収穫やパック詰め作業のスピードなどを他生産者と比較することは難しい。

今回、参加者からはベテラン生産者の作業を実際に見て、その方法や工夫していること等を聞くことができ、大変勉強になったとの感想だった。

今後も新規就農者を産地全体で育成していくため、新規就農者とベテラン生産者の交流や勉強会の開催等、農業普及課として支援を行っていく。

（園芸産地支援第一係・菊井 裕人）



【収穫作業の見学】

■カキ JAぎふ柿塾の開催！

5月8日、JAぎふ柿塾の第1回講座がJAぎふ黒野流通センターで開催された。

柿塾は、柿産地の担い手育成を目的に平成 28 年度から始まり、年間 6 回の講座を設けており、本年度で 4 年目を迎える。

これまでに延べ 30 名以上の参加があり、若手の参加も多く、当塾から 2 名の認定新規就農者が誕生している。

今回は柿の高品質・大玉生産に欠かせない摘蕾についての講習で、新規参加者 2 人の他、前年からの継続者と合わせ、今回 8 人の参加があり、農業普及課およびJA本店職員が室内および現地ほ場にて技術指導を行った。

今後も農業普及課と関係機関でカリキュラムの内容を検討して、計 6 回の講習を開催していく予定である。

（園芸産地支援第二係・鷺見彩子、西垣孝）



売れるブランドづくり

■ニンジン ニンジンの黒あざ症調査実施

農業普及課では、新たなブランド創出支援事業にて、各務原市のニンジン産地振興とブランド化を図っている。

今回その一環として、春夏ニンジンで問題となっている黒あざ症の発生原因の究明と対応策について取り組んだ。

黒あざ症は、高温乾燥により発生が多くなるため、5月9日よりニンジンの品温調査を開始した。

調査は放射温度計を用いて、ほ場および各務原にんじん選果場で行い、結果から品温が上昇するポイントなどが明らかとなった。農業普及課では、引き続きデータを収集し、黒あざ症解決の糸口としたい。



【黒あざ症のニンジン】

(地域支援第二係・水川 誠)

■だいこん べた掛け資材試験

春だいこんは、秋冬だいこんに比べてトンネル設置に要する労力とビニール等の資材費負担が掛かるが、それに見合う販売単価を確保することが難しいため、生産者から資材費低減と省力栽培方法の確立が求められている。

そこで、農業普及課では、岐阜市園芸振興会だいこん部会と連携して簡易被覆（べた掛け資材）による試験ほを設置し、こぶ症や抽苔の発生状況について調査を行っている。

2月から3月上旬に播種した試験ほで調査した結果、慣行のトンネル栽培等と遜色ない生育をしており、現地での簡易被覆による低コスト栽培が確認できたことから、今後の拡大普及が期待できる。



【べた掛け試験ほ場】

(園芸産地支援第一係・高橋 幸蔵)

■水稲種子生産 ハツシモ岐阜SL優良種子生産に向けて

5月7日、JAぎふ羽島東支店において、羽島市水稲種子採種組合通常総会が開催され、組合員全員と羽島市役所及びJAぎふ担当者が参加し、令和元年度事業計画等について協議された。令和元年産水稲種子は、4月1日に岐阜県主要農作物種子条例が施行された後、初めての種子生産になる。

農業普及課からは、栽培こよみを用いて土づくりや基肥施用、除草剤の効果的な使用方法等栽培初期における栽培管理のポイントを説明した。

組合長からは、組合員で協力して全員合格を目指し栽培管理を徹底していきたいと力強い言葉が聞かれた。農業普及課では、引き続き関係機関と連携し、優良種子生産を行うよう、栽培管理指導を行っていく。

(地域支援第二係・今井 啓司)

住みよい農村づくり

■まくわうり 真桑瓜研究会による、まくわうり作付

真桑瓜栽培研究会による、まくわうりの定植が、5月19日に行われた。当日の作業は、研究会員と岐阜農林高校「まくわうりひろめ隊」として活動している学生、先生も加わるなど20名が参加した。

なお、栽培面積は6aほどで、出荷が一時期に集中しないよう、定植を19と30日に分けて作付けが行われる。

「真桑のまくわうり」は、飛騨・美濃伝統野菜であるが、さらにGI表示登録に向け活動しており、農業普及課では今後も栽培指導など研究会を支援する予定である。



【まくわうり定植作業】

(地域支援第三係・野村康弘)